渡　辺　銀　雨

川柳をみんなに

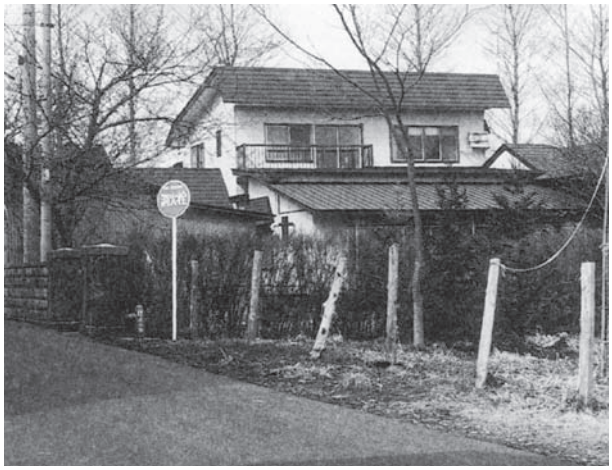
川柳の町

昭和58年（1983）８月16日は、まだ月おくれのお盆休み中でした。その夜、五城目町の人びとは、ＮＨＫテレビの画面を食い入るように見ていました。

テレビは「よめやうたえや川柳天国」を放送していました。番組は、細越の渡辺銀雨の家にカメラをすえての、全国に向けた生放送でした。

自分たちの町からテレビ放送されるなど、めったにないことです。そのうえ、画面の人びとが、銀雨をはじめとしてみんな知り合いばかりですから、誰もが、かたずを飲んで見ないではいられなかったのです。川柳仲間にかこまれ、そのまん中にすわった銀雨は、にぎやかな番組に出演した千両役者のように見えました。それもそのはず、銀雨はみんなの川柳の先生でした。

この日から、五城目町は、「川柳の町」として注目されるようになりました。



渡辺家（細越）

母のすすめ

川柳人渡辺銀雨の本名は彦次郎といいます。明治42年（1909）９月26日、字上町（小池町）の商店に生まれました。

家業を手伝っていた20歳のころに、

「彦次郎、川柳をやってみないか。人間は、なにかひとつ趣味を持っていないと、だめだものだよ。川柳って、なかなかおもしろいものだから、やってみれ。」

と、母タニに川柳をすすめられたのです。

「彦次郎は、川柳がうまくなりそうだ。」

そのとき、母にいわれたことばを、いつまでも銀雨はおぼえていました。

タニは川柳が趣味でした。大正時代は、全国的に川柳が流行し、各地に川柳を楽しむグループができました。五城目町には、めずらしいことに女性の川柳の会があって、タニもその会員でした。毎月集まって川柳の勉強をする熱心さで、家が会場になったときは、銀雨も加わって、みんなの批評をうけました。

仲間たち

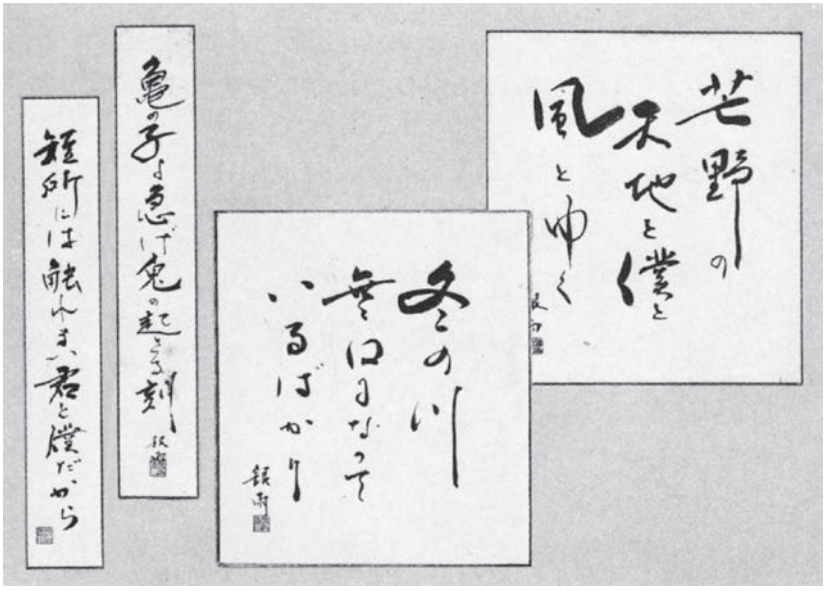
銀雨の川柳は、母タニにすすめられるままに、なんとなくはじめたものでしたが、母と同じ屋根の下で暮らしているのですから、いつも川柳といっしょにいるようなものでした。

そして、川柳の楽しさにいつの間にかとりつかれていました。

町には、川柳をしている人たちが多くいて、いくつかのグループをつくっていました。さそわれて、あちこちの川柳の集まりに出ていると、銀雨の作品はいつも注目されました。

川柳は短詩型（たんしけい）の文芸ですから、いそがしい店の仕事の合い間でも、ふと目にうつり心にうかんだことを、17文字でメモしておけます。銀雨は、日記のように毎日川柳をノートに書きつけるようにしました。

自分の気持ちにも生活にも、もっとも合った文芸は川柳だと、ノートの句が多くなるにしたがって、銀雨は強く思うようになりました。一生、川柳を勉強していこうと心で決めたのです。



自筆の色紙とたんざく

そういう想いが高まってきて、仲間を集めて昭和11年（1936）「すずむし吟社」という川柳の会をつくりました。10数人の仲間は、すべて20代です。27歳の銀雨が会長役になりました。それから亡くなるまで、銀雨はすずむし吟社の責任者をつとめ、仲間は後輩の世話や指導をつづけました。

この若い人たちだけのグループの世話役は銀雨でしたが、はじめ川柳の指導者になってくれたのは、町の柳人貝田乱声でした。

銀雨は家業の店の手伝いをし、趣味は川柳ひとつというような人ではありませんでした。草野球のメンバーだったほかに、町の若者の集まりなどにもよくさそわれ協力したりしていました。「彦さん」とだれからも声をかけられ、友人知人の多い人でした。そして、みんなに信頼されるようになっていました。

いろいろな人とのつきあいや、いろいろな体験と見聞が、銀雨の川柳を豊かなものにしたのです。

太陽に問えば

すずむし吟社が発足した次の年、昭和12年（1937）日中戦争がはじまりました。戦争は、さらにひろがり、昭和16年（1941）太平洋戦争が起こりました。

吟社は若い柳人ばかりでしたから、次々に召集され戦場に向いました。20名近かった吟社は、わずか3名になってしまいました。

銀雨自身にも、昭和19年（1944）の暮れに赤い紙の召集令状が来ました。35歳の銀雨は、ひとりの兵士になりました。そのころの日本には、もう戦争をつづける力はなくなっていて、敗戦が間近でした。

銀雨にとって、軍隊は楽しいところではありませんでした。若くないのに一番下の位の兵士だと、位の上の者にいじめられる場合も少なくありません。

ある日、疲れ切った銀雨は、「小休止」の号令と同時に演習地の草原にたおれこんでしまいました。仰向けになった顔の上に、夏の太陽がありました。

太陽に問えば　明日(あした)があるという

そのとき、自然に口をついて出たのがこの１句でした。

どんな苦しいことにも、明日があると思えばたえられる。その明日は、きっとすばらしいだろう。そういう思いが、胸をひたしてきました。川柳に助けられた、と銀雨は思いました。

それから間もなく、長かった戦争はおわりました。

吟社ふたたび

会員が召集されて休んでいたすずむし吟社は、戦後に会員が集まって、ふたたび活動しはじめます。銀雨が中心になったことは、いうまでもありません。

いまは楽しむだけのものではなく、川柳は銀雨にとって、生き方になっていました。川柳の心で、社会の動きも見つめようとしました。

川柳に対する真けんな取り組みは、すばらしい作品を生み出しました。その結果、川柳誌の『宮城野(みやぎの)』『さいたま』『時の川柳』などの年度賞を、次々に受けることになりました。

「秋田県に渡辺銀雨あり」と全国の柳人が注目するようになりました。そうなると、いろいろな川柳大会やコンクールの審査員、選者にたのまれるようになります。新聞の柳壇の選者も長年つとめました。

川柳活動で年々いそがしくなりましたが、銀雨は戦後にはじめた印刷

川柳の仲間たち（前列まん中が銀雨）

業の仕事を、決して人まかせにしたりはしませんでした。文芸活動と職業を両立させ、その上でりっぱな作品を生みだしたのです。

吟社をふたたびはじめてから30年の昭和51年（1976）、67歳の銀雨は吟社の川柳誌『すずむし』を月刊（げっかん）にします。全国的な川柳の団体、といっても数えるほどしかありませんが、それが月刊で柳誌を出しているだけです。地方の川柳の会が、月刊柳誌を出すというのは、柳人の間で大きな話題になりました。

印刷所を銀雨が持っていたこともありますが、すずむし吟社は月刊にできるほどに全県からたくさんの会員を集めていました。『すずむし』は、いまも月刊をつづけています。

銀雨は自分の句作の努力だけでなく、川柳の同好者をふやすことや、後輩を育てることにも力を注ぎました。町の婦人会や中学校に川柳クラブをつくることをすすめ、よろこんでその指導に出かけました。各地のグループの指導にも出かけています。生活にとけこむ短詩型文芸の川柳を、銀雨は自分の経験から考えて、人びとにひろげたかったのです。

師を持たなかった銀雨が、川柳作家の名が高くなったのは、いつも自分の目でものを見てこつこつと勉強をつづけたことが第一ですが、よい仲間と家族にめぐまれたことも見落せません。家族みんなが、銀雨を師にして、句をよみ合うという、めずらしい川柳一家が銀雨の文芸活動を支えていたのです。

川柳句誌『すずむし』

句　碑

70歳になった昭和54年（1979）、町は長い間の活動に対して功労者の表彰をしましたが、ＮＨＫテレビに出演したあとは病気がちになりました。「よめやうたえや」とにぎやかに川柳の会を行うわけにはいかなくなったのです。

川柳を教えてもらった多くの人びと、友人や知り合いの人たちが、募金をして、銀雨の川柳句碑を四渡園にたてたのは、昭和60年（1985）9月15日でした。碑には、「太陽に問えば」の句が刻まれています。

銀雨が亡くなったのは、句碑がたって10日後のことでした。76歳でした。

銀　雨　の　句　碑

参考資料／『句集　共に生きて』（昭和60年）